

ふたたび啄木、あるいは賢治と啄木

米田利昭

ふたたび啄木とは、まずはもう一度石川啄木をとりあげる、つまり啄木再読とか再論とかいう意味である。わたしは十数年前に『石川啄木』（一九八一年、勁草書房）なる本を書いたが、しばらくして店頭から姿を消したまま世も人もそんな啄木読みのあったことを忘れている。どうか命のあるうちにもう一度書きたいものだ。なぜなら、偉くならうとしてなれなかった啄木は、わたしに合っている、彼の気持がわかるように思われるから。しかし、こんな筈ではなかったと思いながら、ズルズルと日が経ち、気がつく時代がすっかり移っていたわたしの思いと、鋭才の啄木はちがうだろう。彼はどんな経験をしたろうか。それを書いてみたい。前回肩に力が入ったが、今回は平常心で書けそう。その機会が案外早く与えられたことを大変嬉しく思っている。そのうえ再論にはもう一つの意味がある。現在では十歳下の同じ岩手の詩人宮沢賢治に圧倒されて、誰からもかえりみられなくなった啄木だが、もういっぺん世の中からふりかえって見られる日が来るにちがいない。彼はそれだけのものを持っているのではないか。それを確かめたい思いもわたしには強くあるのである。

一 賢治と啄木——「竜と詩人」を例に

大正十年八月二十日（家出の年の帰郷直後）の日付を持つ賢治の習作期の童話「竜と詩人」を読む。若い詩人のスールダツタは歌競べの会に桂冠をかち得た。いちばん偉い詩人のアルタはじぶんの高い座にスールダツタを座らせ、これをほめる偈^げを唱えて東方へ去る。ところがスールダツタは、あの歌は洞窟に閉じこめられた老竜チャータの歌を盗み聞いて歌ったものだとかげ口されて足がふるえ、そういえば洞の上でまどろむうち聞いたような気がする、私は自分を罰しよう、どうか許してほしい、と竜に許しを乞いに来る。竜は、「アルタはどういってお前をほめたか」と聞く。

風がうたひ雲が応じ波が鳴らすそのうたをたゞちにうたふスールダツタ

星がさうならうと思ひ陸地がさういふ形をとらうと覚悟する
あしたの世界に叶^{かな}ふべきまことと美との模型をつくりやがては世界をこれにかなはしむる予言者、

設計者スールダツタ と、かういふことであつたと思ふ

竜はアルタをほめ、「スールダツタよ、あのうたこそはわたしのうたでひとしくおまへのうたである。」そのときわたしは雲であり風であつた、おまえも、アルタがいたらアルタも同じうたをうたつたらう、だからあの歌はおまえのうたでまたわれわれの雲と風とを御する精神こころのうただ、と言って、文学上やかましい模倣問題を否定してしまふ。こんなふうには模倣者を許せたら、わたしはどんなに氣持良からう。

竜は、お前に贈物をしよう、といつて赤い珠を吐く。「その珠は埋もれた諸経をたづねに海にはひるとき捧げるのである」と。スールダツタはよろこび、「わたしはわたしの母に侍し、母が首尾よく天に生れたらばすぐに海に入つて大経を探らうと思ふ。」それまで珠をあずかつてほしいとたのむ。そして竜と別れるのだが、この話に、啄木と賢治の關係、そして賢治の仕事のほとんどすべてが暗示されていると思う。

後者からいうと、風がうたい、雲が、波が鳴らすうたをそのままうたうとは、賢治の文学の理想だつた。「わたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるへながら立ちますと、もうどうしてもこんな氣がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたまでです。」(『注文の多い料理店』序)と言っているのだから。

理想の世界を構想して、やがて世界をそこへ導く予言者、設計者と

は、今日、人間の利益のみを優先させることなく自然との共生を計るエコロジー思想(生態系を守る運動)の旗じるしとなつてゐる賢治その人であろう。自己処罰も、賢治と童話の主人公たちの特徴だし、母への愛も、大経(人間の生き方を定めたテキスト)を探し広めることが人生最後の目的だというのも、そのための自己犠牲も、賢治の生涯の語るところだ。要するに賢治のすべてがこの処女作の中にあるといつていい。

そしてスールダツタを認めてその地位を譲り去りゆく「いちばん偉い詩人」のアルタが、啄木に当るだろう。この話から賢治と啄木の間に幾つかの共通点かつ相違点が見えてくる。一は母への愛。二は自然の尊重ないし歌の作り方。三は理想の作り方をめぐつてである。母への愛は同じでも、賢治では少年が母を慕うように、ただ愛している。ジョバンニの母への愛、カンパネラの母への愛がそれだ。比べて、結婚もした啄木の母への愛はもっと複雑で現実的だ。中学の同級で明治三十七年夏に宝徳寺に二泊した小沢恒一^①は、「啄木は額の丸い、眼の大きな、口元の引きしまったところなど、お母さんそっくりで、……『一や、一や』と呼ぶ母親の甘つたるい声色は私に深い印象を与えた。」^②という。

たはむれに母を背負ひて

そのあまり軽きに泣きて

三步あゆまず

もあるが、むしろ逃れようとしても、どこまでも追ってくるいざりの
嬸の姿であり、

「このあいだみやぎさまにおくられしおてがみでは、なんともよろこびおり、こんにちかこんにちかとまちおり、はやしがつになりました。……そちらへよぶことはできませぬか？　ぜひおんしらせくなされたくねがいます。このあいだ六か七かのかぜあめつよく、うちにあめむり、おるところなく、かなしみに、きょうこおほいたちくらし、なんのあわれなことおもいます。しがつ二かよりきようこかぜをひき、いまだなおらず、あさ八じで、五じか六かまでかえらず。おつかさんとなかれ、なんともこまります。それにいまはこづかいなし。いちえんでもよろしくそろ。なんとかはやくおくりくなされたくねがいます。おまえのつごうはなんにちごろよびくくださるか？　ぜひしらせてくれよ。へんじなきとはこちらしまい、みなまいますからそのしたくなされませ。はこだてにおられませんから、これだけでもうしあげまいらせそろ。」

という手紙をよこす母である。夫婦の寝室に入ってくる母。啄木病あつく、施療の病院を見つけたから一刻も早く入院するようにと知らせた佐藤真一に、母も死の床にある、その母をおいて自分一人入院するわけにはいかないとことわりを言う啄木である。そういう現実的などうにもならぬ母と子だった。

風の歌うまをその通りに歌う賢治。自然尊重は啄木も同じだが、このことは二人の文学の作り方の違いを考えさせる。啄木の歌は『明星』『スバル』の人々との交流から生まれている。具体的には晶子や白秋から。小説は独歩や二葉亭から生まれている。文学は文学から生れる。しかもその伝統を批判し改変しようとする（歌の三行書き、ロー

マ字日記など）。賢治では文学は自然の直接の模倣だから、他の文学とは関係ない。伝統のない素人の文学としての長所と欠点を持つ。独創と、わかりにくさだ。孤独な推敲の努力には敬服するが。

これを言い換えると、啄木では、

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

のように小なる人間が大なる自然と向きあうが、賢治では自然と人間がまじりあう。井上ひさしはこのまじりあい、互いに領域を侵しあうところに賢治独特のオノマトペが生ずると言っている。

最後に賢治の場合、人間の理想は既に大経に書かれてある。ただ経の読み方一つでどうにでも融通がつき、新時代に適應してゆくが。啄木では、他を批判することで理想を書き換え、自力で新しく理想を作ってゆく。こんな違いがあるだろう。

*

啄木はリアリズムの文学、賢治はシュール・リアリズムの文学と言ったのは黒井千次だ。なるほど同じ岩手山を歌っても、

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

（啄木）

啄木を読めば読者は自在に美しく均整のとれた故郷の山をそれぞれに描くことができるが、

そらの散乱反射のなかに

古ぼけて黒くゑぐるもの

ひしめく微塵^{みじん}の深みの底に

きたなくしらく澱^みむもの

(賢治)

硬質な言葉と光りで、宇宙から覗いて見たように、しかも凸型を逆にえぐるように造形している。時代の好みがシンメトリーからデフォルメへ移ったとされる今日、賢治の方が人気を博するのだろうか。

平岡敏夫^②は革命や民主主義の色あせた今日、「革命的民主主義の詩人」ということでは最早啄木をすくいとれなくなつた。「大なる神才^{ジニヤス}は短かき伝記を有す」と言つた透谷をはじめ独歩や芥川らと共に、文学史上の天折天才のイメージですくいとれないか、と言つた。

それらもあるがわたしは啄木は、自然を守れと言つた反文明の詩人として評価できるのではないかと思う。エッセイ「一握の砂」「一握の砂」は歌集の題だけでなく、啄木お気に入りの言葉で、彼は二度も同題のエッセイを書いている。その一つ明治四十年九月にいう、

「かくの如くして、かの小児の心の全たく死し尽したる時、人は之を称して成人したりと謂ふ。小児は成人の父なりとは湖畔の詩人が歌へるところなりき。然れども之を今の世に見るに、人は成人たらずむとして先づ小児を殺さざるべからず。噫、神は小児を作りき、然れども人は成人を作りぬ。」

小児の心、人間の自然性をこそよしとする。湖畔の詩人ワーズワースと共に、小児こそ成人の父、つまり人間の基本となる、あるべき姿だという。

「自然は人類の父母なりき。哀れむべき父母は今随所に其愛児のた

めに手を咬まれつつあり。人は自然を殺戮^{きつり}し了らむとして、先づわが小児の心を殺し尽す。噫、これ豈^{あた}最も憎むべき反逆ならざらむや。」

人類が自然を殺し尽そうとしているのは、自然に対する憎むべき反逆だ。だから我等は反逆の反逆、正しき反逆をこそしなければならぬ。故郷の林が養つたのか、文明の大都市で成功できないという逆境が養つたのか、啄木には、文明の暴力から手つかずの自然を守れという考えがある。猿と人の争いでも、猿からいろいろと批判された人間が、ようし、世界中の森林を伐り尽したらお前の栖^{すみか}はなくなるぞ、と脅すと猿が、「噫々、汝は遂に人間最悪の思想を吐き出せり。」と言ふ、

「汝等は随所に憎むべき反逆を企て、自然を殺さむとす。自然に反逆するは取りも直さず之れ真と美とに対して奸悪なる殺戮^{きつり}をなす也。汝等は常に森林を倒し、山を削り、河を埋めて、汝等の平坦なる道路を作らむとす。然れども其の道は真と美の境——乃ち汝等の所謂天に達するの道にあらずして、地獄の門に至るの道なるを知らざるか。」

これは反近代の思想だろう。北海道時代のことを書こうとした小説「菊池君」では、一ヶ所に長く、特に順境の中では長く落ちついていられない気持を、「自ら死ぬ風の心」と言つた。

「世が毎に月毎に進んで、汽車、汽船、電車、自動車、地球の周囲を縮める事許り考へ出すと、徒歩で世界を一周すると云ひ出す奴が屹^{きつ}度出る。——詰り、私の精神^{こころ}も、徒歩旅行が企てたくなつたのだ。喧嘩の对手が欲しくなつたのだ。」

制度への冒険の理由に文明への反逆を持ち出すほど、啄木においては

両者は同じだった。

賢治が啄木の反対のために持ち出す汽車などに反対でないことはいうまでもない。虔十が杉を植えた「虔十公園林」の林も、鉄道が来、駅が出来ていつか町の中になる。賢治少年自身も山林または海浜に工場を建て、木材を乾溜してアルコールを採ったり、鉱石を買い集めてイリジウムその他を採ることを夢見ていた。啄木が社会の圧迫に抗して、手つかずの自然を守れと言ったのは、単純だが力強い。今日のように文明の害毒を止めようとする時代の役には立たぬものか。

＊＊

綱島梁川が死んだ時、啄木は北海道にいてその追悼文を北門新報に書いたが、それにふれて吉田精一がこう言っていると、新潮文庫『石川啄木集』の解説に古谷綱武が吉田の説を引いて、言っている、

「綱島梁川は、明治三十六年から四十年にかけての日本の『思想界の思潮』を代表し、青年が憧憬^{どうけい}渴仰^{こくやう}を一身にあつめた。ひとたび無限に拡大された自我が、その内証^{ないしやう}につかれて人生の行路難を嘆じる時、すがらんとする最後の境地は宗教である。啓蒙^{けいもう}時代にわずかに発生心理的に解釈されて余喘^{よぜん}をたもった宗教の本質がここに見直され、自我の葛藤^{かつとう}になやむ青年達は相ひきいてこの門に走った」(吉田精一) 啄木もまた、このような時代思潮の影響を受けたひとりなのだろう。」

と。自我の拡大は明治大正の青年たちの理想だったが、とくに日露戦争後、拡大され行き詰まった自我のゆくえは宗教であった。その代表が梁川であった。啄木は『あこがれ』を懷に梁川を尋ね、以後も啄木

によると親書の往来があり、敬慕はしたが、帰依はしなかった、という。何故か。生命に二つの欲望がある、自己発展の意志と自己融合の意志と。梁川はその一方に立ち、自分は他方に立つ。人生の両面を包有するのは偉大なる人格、天才に限られる、と。

「一切を疑ひ尽して、然も遂に疑ふ能ざるものあり。自己の存在即之也。」

という啄木にとって、自己犠牲の宗教へいくことはできなかった。以後の啄木の足どりは、自己拡大を極限までおしつめてゆくと自己破壊になると身を以て体験し(ローマ字日記の頃)、やがて当時の最も恐るべき世論である「国体」(天皇制)を批判することを通して、自己発展と自己融合を一つにする道を択ぶ(大逆事件以後)。いわば近代の自我を社会改造の方向へ超えようとした。

宗教へいったのは啄木より十歳若い宮沢賢治だった。

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに感じて

行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である

(農民芸術概論綱要、序論)

あるいは「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちばらう」(同、農民芸術の綜合)と言うのだから。

啄木より十九歳年上の夏目漱石が近代的自我の必要とその超克とを生涯のテーマとしたことは周知だろう。「私の個人主義」(大正三年)に言う、自己の個性を發展させることは大事だが、それをしようと思うならば、他人の個性も尊重せよ。権力や金力には責任が伴うと覚悟せよ。これを漱石は、人格の支配を受ける必要がある、とも言った。自由を行使する人間の内部に、自己を規制する倫理を要求したのだ。

三人三様に近代の自我を超えようとしたが、中でも啄木と賢治は正反対である。啄木は他人を批評することを通してあるべき明日を考察する。賢治では一人一人が宇宙の真理と向き合ってひたすら高まろうとするのだから、他人の批評などはするな、ということになる。

或る本の或る頁に二人の言葉が並んでいた。

明日の考察！これ実に我々が今日において為すべき唯一である。
そうして又総てである。

啄木

宇宙は絶えずわれらによって変化する

誰が誰よりどうだとか

誰の仕事がどうしたとか

そんなことを言っているひまがあるか、

賢治

賢治にも矛盾がある。みんなの本当の幸せを求めるとは、現実そのまの肯定になりかねない。したがって、それを強行するのは、あまりいい子すぎる。啄木から賢治へ移った流れが、還流し、啄木が見直される時代も来るのではなからうか。

二 日本のうたのふるさと

啄木の歌が独歩から、白秋から、あるいは蕪村、雪舟伝説から、またはフランス近代詩の翻訳などから影響を受けていることは確かだが、同じ啄木の歌が後代の文学、芸能に影響を与え、現在でも影響を与え続けていることはこれも確かであろう。

中でも同年だが萩原朔太郎、六歳下の芥川龍之介への影響はいちじるしい。

わが泣くを少女等きかば
病犬の

月に吠ゆるに似たりといふらむ

これが朔太郎の詩集『月に吠える』を引き出したのはいうまでもない。詩集のタイトルだけでなく、「悲しい月夜」「見しらぬ犬」などいくつかの詩だけでなく、あの詩集全体のトーン、くねくねした、不気味な、それでいてまじめのような、ある所は饅頭まんじゅうえたような、倒錯した感覚世界を作り出す基礎の所に啄木の歌があるように思われる。

あたらしき背広など着て

旅をせむ

しかく今年も思ひ過ぎたる

貧しい生活から生れた生活の夢が朔太郎になると、

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新らしき背広をきて

きま、なる旅にいで、みんな
汽車が山みちを行くとき

みづいろの窓によりかゝりて

われ一人うれしきことを思はん

五月の朝のしのめ

うら若草のもえいづる心まかせに

夢がどんな一人歩きして、汽車に乗って旅に出てしまふ。五月の朝の風景と共にその空気まで入ってくる。啄木の生活者の夢とは全く別な、夢のための夢を作りあげてしまふ。

一隊の兵を見送りて

かなしかり

何ぞ彼等のうれひ無げなる

が朔太郎の「軍隊」、あまり長いので一節だけ引用する、

お この重圧する

おほきなまつ黒の集団

浪の押しかへしてくるやうに

重油の濁った流れの中を

熱した銃身の列が通る

無数の疲れた顔が通る。

ざつく、ざつく、ざつく、ざつく

お一、二、お一、二。

啄木では庶民的なインテリが、すれちがった一隊の兵士たちを見て、可哀想に何だか少し疲れているようだな、とか、元気だな、あの単純

さがうらやましい、とか思う。この場合は後者のように思う。そんな生活的な感想が、朔太郎になると、全体が油でぎちぎちした沢山の若い肉体と、軍服、背囊、銃身、銃剣といった重量ある無機物とで織りなす、織り物というには厚みも生氣もある、巨大な化け物としての軍隊をとらえている。こんな風にとり出していったらまだまだきりなくあるであろう。

芥川では、

ある朝のかなしき夢のさめぎはに

鼻に入り来し

味噌を煮る香よ

女と別れる夢か何か悲しい情緒にひたっていたら、味噌を煮る香、つまり味噌汁を作る匂いがした、という。感傷の中に突然飛び込んできた生活実感の滑稽。『スバル』風のへなぶり歌だった。同巧異曲に、

水のごと

身体をひたすかなしみに

葱ねぎの香などのまじれる夕

がある。この葱なのだ、芥川が真似たのは。こういうセンチメンタルな情緒への「生活」の侵入を、こいつは面白い、皮肉だなあ、と思つたにちがいないのだ。

芥川の小説「葱」はこうである、女をいかかわしい家へ誘って誘惑しようとかくらんでいるモダンボーイの田中君、といっしょに歩きながら恋愛と芸術（「不如帰」ほととぎす）に酔っているお君さん、

「その内にふとお君さんが気がつくと、二人は何時か横町を曲つた

と見えて、路幅の狭い町を歩いてゐる。さうしてその町の右側に、一軒の小さな八百屋があつて、明く瓦斯の燃えた下に、大根、人参、漬け菜、葱、小蕪、慈姑、牛蒡、八つ頭、小松菜、独活、蓮根、里芋、林檎、蜜柑の類が堆く店に積み上げてある。その八百屋の前を通つた時、お君さんの視線は何かの拍子に、葱の山の中に立つてゐる、竹に燭奴を挟んだ札の上へ落ちた。札には墨黒々と下手な字で、「一束四銭」と書いてある。あらゆる物価が暴騰した今日、一束四銭と云ふ葱は滅多にない。この至廉な札を眺めると共に、今まで恋愛と芸術とに酔つてゐた、お君さんの幸福な心の中には、其処に潜んでゐた実生活が、突如としてその惰眠から覚めた。間髪を入れずとは正にこの謂である、薔薇と指環と夜鶯と三越の旗とは、刹那に眼底を払つて消えてしまつた。その代り間代、米代、電燈代、炭代、肴代、醬油代、新聞代、化粧代、電車賃——その外ありとあらゆる生活費が、過去の苦しい経験と一しよに、恰も火取虫の火に集る如く、お君さんの小さな胸の中に、四方八方から群つて来る。お君さんは思はずその八百屋の前へ足を止めた。それから呆氣にとられてゐる田中君を一人後に残して、鮮な瓦斯の光を浴びた青物の中へ足を入れた。しかも遂にはその華奢な指を伸べて、一束四銭の札が立つてゐる葱の山を指さすと、「さすらひ」の歌でもうたふやうな声で、「あれを二束下さいな。」と云つた。

はなじろむモダンボーイ。芥川は軽快なテンポで物語を転換させ、結末へ急ぐ。短篇小説家の技量の冴え。もとを提供した啄木にも、八百

屋の店先を扱つた小説「天鷲絨」がある。比較してみよう。

床屋にそののかされ、東北の村を家出して憧れの東京に来て、女中奉公に出たお定は、翌朝奥様から八百屋へ行つて葱とキヤベージを買つて来いと言われ、キヤベージがわからないのでおそるおそる聞くと、それこんなので、と説明される。「ハア、玉菜でござんすか。」「名は怎でも可いから早く買つて来なよ。」

「八百屋の店には、朝市へ買出しに行つた車がまだ歸つて来ないので、昨日の売残りが四種五種列べてあるに過ぎなかつたが、然しお定は、其前に立つと、妙な心地になつた。何とやらいふ菜に茄子が十許り、脹切れさうによく出来た玉菜が五個六個、それだけではあるけれど、野良育ちのお定には、此上なく慕かしい野菜の香が、仄かに胸を爽かにする。お定は、露を帯びた裏畑を頭に描き出した。ああ、あの紫色な茄子の畝！　這ひ蔓つた葉に地面を隠した瓜畑！　水の様な暁の光に風も立たず、一夜さを鳴き細つた虫の声！

萎びた黒繻子の帯を、グラシなく尻に垂れた内儀に、『入来しやい。』と声をかけられたお定は、もうキヤベージといふ語を忘れてゐたので、唯『それを』と指さした。葱は生憎一把もなかつた。

風呂敷に包んだ玉菜一個を、お定は大事相に胸に抱いて、仍且郷里の事を思ひながら主家に歸つた。勝手口から入ると、奥様が見えぬ。お定は密りと玉菜を出して、膝の上に載せた儘、暫時は飽かずも其香を嗅いでゐた。

『何してるだらう、お定は？』と、直ぐ背後から声をかけられた時の不愜さ！

啄木は物語の結末なんかどうでもいいのだ。それよりも部分だ。はじめて東京という大都会へ来た人間は、田舎の生活をどんなに懐かしく思い出すことか、どんなに帰りたいか、それが言いたかった。それは啄木自身の思いでもあったから。

その他啄木の歌の影響は、題だけでも芥川の「一塊の土」山本有三の「路傍の石」赤彦憲吉合同歌集「馬鈴薯の花」現代の歌人小池光の「草の庭」も啄木晩年の詩「家」の中からとつたと自ら言う。あるいは女優の名「黒木瞳」しばらく前だがテレビの朝の連続ドラマ「駅」が「うたふごと駅の呼びびし／柔和なる／若き駅夫の眼をも忘れず」を枕にしていた。あるいは「きしきしと寒さに踏めば板軋む／かへりの廊下の／不意のくちづけ」を挙げてこんな風に寮舎が老朽化していると訴えるハンセン病患者の訴えもあった。

啄木の歌から歌謡曲、演歌へととなると、これはもう枚挙にいとまがない。

東海の小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて

蟹とたはむる

いたく錆びしピストル出でぬ

砂山の

砂を指もて掘りてありしに

潮かをる北の浜辺の

砂山のかの浜薔薇よ
今年も咲けるや

これから、

へ砂山の砂を指で掘つてたら

真赤にさびたジャックナイフが出てきたぜ

どこのどいつが埋めたか

胸にじんと来る 小島の秋だ

(さびたナイフ 石原裕次郎の唄)

へ北の浜辺に 咲くはまなすの

花は紅色 命の色よ

夢を追いかけて ああ海越えた

あなた恋しと せのびする

泣いて泣いて 泣きぬれて

立待岬の 蟹になろうと

悔いはしません この命枯れ果てるまで

(立待岬 森昌子の唄)

などが作られ、

馬鈴薯のうす紫の花に降る

雨を思へり

都の雨に

から、へ都に雨の降る夜は 涙で胸もしめりがち (誰か故郷を思わざ

る) などが生まれたろうことは疑いを容れない。

啄木の歌はどうして日本の歌のふるさとなったか。それは、啄木だけがどうして日本を代表する詩人となり得たか、でもある。

はじめて啄木全集が世に出たのは没後八年、大正八年のことで、この時は新潮社の社長の決断による犠牲的出版だったという。しかし、それは案に相違して売れに売れた。

大正時代、田舎から都会へ成功を夢見てやって来る啄木の人生の人は、大衆的規模でふえた。彼らが啄木を支持したのである。

『一握の砂』の序文で藪野椋十が「さうぢや、そんなことがある、斯ういふ様な想ひは、俺にもある。」と言ったが、この啄木の歌を読んでわがことと思う理由について、「啄木の自身に対する愛惜。これが、啄木の「へうた」の核心である」という松本健一⁽⁵⁾は、啄木は「個的な体験を、象徴行為へと昇華させることによって大衆の追体験を許している」という。では何が象徴を可能にしたか、「言葉の先鋭化を放棄すること」「『無策』、いいかえれば技巧の放棄こそが、大衆に自己投影を許す無方法の方法」だったという。また別の所では「フィクションによる再現が、個的なドラマを普遍化する」ともいつている。

無技巧とフィクション、それはたしかにそうだ。例もたくさん思い浮かぶ。ふるさとの歌、山の歌、晩年の閑古鳥の歌。だが、他の人の歌では、フィクションを使ってもちつとも面白くないもの、口語的無技巧をやっても少しも大衆的にならないものが多い、とくに啄木を継承したと自称する生活派やプロレタリア派の短歌に。

だから無技巧とフィクションも答えにはちがいないが、歌の作り方に即しすぎている。もつと本当の答えがあるのではないか。作る以前

に問題があるのではないか。松本が、啄木は「自己の内的な「自然」と闘いつづけていた」と言ったことが、これは阿木津英が「鬱^{うつ}の日は花を買いきて家妻と親しむなどの発想憎し」と歌ったことに触れて、阿木津は啄木が「自己の内的な「自然」と闘いつづけていた」ことを見逃しているようだ、と使ったのだが、これがおそらく本当の答えであろう。内的な「自然」とは松本によると社会通念、通俗道德ということだそうである。それとの闘いがあってこそ啄木の無技巧、フィクションの歌も生きる。くだいて言うと、自分を、いや自分だけでなくすべてを、短歌形式までもバカにしていないと——この言い方はむずかしいが、こうとしか言いようがない——歌は生きない。いいかえると啄木の日記があつてはじめて歌が成り立つということであろう。

しかし、「故郷の山河をあとにし、老父母を捨てて、都会へとでていった近代日本の『大衆』に普遍的なドラマでもあった」(松本)啄木の歌も、一九六〇年代のいわゆる高度成長期を境に、変りつつあるのではないか。人々が田舎から都会へ何かを求めて出て来なくなれば、出て来ても故郷へ帰りたい気持がなくなれば、それまでである。それどころか今はイーハトーブとか縄文まほろばとかいつて、どこでもかまわない、祭りを求めて行く、そしてそこではこちらの懐中の金をしか欲していないと知って、失望する、そんなことが流行になっている世の中なのだ。

故郷の喪失である。啄木の「田園の思慕」にいう都市移住者の第三代目のように、思慕すべき田園ばかりでなく思慕すべき一切を失った状態である。こんな心がたとえば俵万智の『サラダ記念日』の歌に見

られるのではないか。わたしはそれと啄木を比較したことがある。

生ビール買い求めている君の手をふと見るそしてつくづくと見る

本歌はむろん「はたらけど／はたらけど猶わが生活楽にならざり／ちつと手を見る」だろうが、啄木がわが手の向うに、この手で支えてきた生活の苦しみ、これまでもこれからも続くであろうその集積を見ているのに、万智の「君の手」は異性の手であって、生活するための手ではない。いわば珍らしいものとして、男の身体の一部の手というものを発見した滑稽さなのだ。

砂浜に二人で埋めた飛行機の折れた翼を忘れないでね

「いたく錆びしピストル出でぬ／砂山の／砂を指もて掘りてありしに」啄木のは砂を掘っていたらピストルが出てきた、それがへいたく錆びているので、自殺を計った遠い過去を思い出し、それをきっかけに内部に自分史を構築してゆくが、万智のは「二人で埋めた飛行機の折れた翼」が、例えば幼い恋とか同棲といった共有の挫折体験を意味して、それを「忘れないでね」とは逆に忘れてしまおうという気持であろう。いわば自分史の一部をものの断片のごとく埋めてしまおうというのだ。

土曜日、日曜日、木曜、火曜、十二月、八月三十一日、二学期、二月、三月、三時半、四時、五時半、六時とやたらと時に関する言葉が万智の歌には出てくる。時間は有るが、歴史が無い。いや歴史を消すために循環する時間がちりばめられている。

この人は「トーストの焼きあがりよく」といい、「ワイシャツをばばんと伸ばし」といい、日常的な食事や洗濯を、生活として楽しんでいる。そんな青春の故郷との関連こそ見ものだ。

庭に出て朝のトマトをもぎおればここはつくづくふるさとである
食としてのふるさととは新鮮だが、かつてあったふるさとの神格化、絶対化はない。「ふるさとの山に向ひて／言うことなし／ふるさとの山はありがたきかな」そこ以外にない自分の根っこに立ち返って出直すという呪力が、万智の歌にはない。「期限つき周遊券にて帰省する ふるさととは吾の途中下車駅」ふるさととは多くの駅の一つにすぎないのだ。これを言ったら、わたしの娘が、それは万智さんが女だからよ、ふるさとの家から身を立て名を挙げの男と違って、女は変るもの、移ろいゆくものだからよ、という。そうだろうか。現代では移ろいゆくものは女に限らないのではないか。

チョコレートパフェを好める弟を抱きしめてまたふるさとを発つ
は「わかれをれば妹いとしも／赤き緒の／下駄など欲しとわめく子なりし」に見合うが、妹を通して故郷との繋がりを作ろうとする啄木に對し、弟の好みを思い出し抱く儀式を経て故郷を捨てる。このライトパースの歌人はあんがい孤独である。「いつでも一人いつだって一人」と歌うように。

もはやふるさとに人をひきとめる力がない。ふるさととも都会もどこもみんな平均化して砂漠のようになってゆく。啄木の歌の呪力もなくなる。そういえば最近の演歌やフォーク、ニューミュージックには啄木の歌の影響を指摘できるものがほとんどないようだ。すると啄木よりも賢治の歌の方が、まだ生きのびるだろうか。

しかし、近頃よく聞く「星めぐりの歌」、

あかいめだまのさそり

ひろげた驚のつばさ

あをいめだまの小さいぬ

ひかりのへびのとぐろ

オリオンは高くうたひ

つゆとしもとをおとす

にしても、特殊な賢治の世界へ入るための導入の暗示であって、さあ入るぞと覚悟はきまるが、それで自己の怨念をはらすといったものではないから、愛唱、まして模倣とはいかないだろう。

一ばん人口に膾炙している「雨ニモマケズ」は一種のありがたいお経のようなものだから、暗唱すれば安心していられるものの、自分の中の弱さや悪さをえぐり出したものではないから、歌いたくなる性質のものでない。

「日ハ君臨シカガヤキハ 白金ノアメソソギタリ」に始まる精神歌、まして「永沢の朝」、あるいは「饑餓陣営」のバナナン大将の歌などもあまりに崇高、厳肅、または滑稽で歌うには適しない。賢治が大衆の歌声のもとになることは、まずないのではなからうか。

啄木も賢治も手本にならない、まったく新しい、われわれの経験したことのない歌の時代がくるようだ。

三 「日本一の代用教員」——教師としての啄木

啄木が教師をしたのは郷里の渋民村で、明治三十九年四月から四十年四月初めまできっかり一年の間である。その後函館でも教師をしたが、それはひどいことに新聞記者との掛け持ちであり、またほんの腰

掛けだった。

明治三十九年三月四日に盛岡から渋民に戻ったのである。それまで三十五年秋季と三十七年秋季の上京は、どちらも失敗だった。一回目は都会の巷塵の中に行き暮れ病み倒れていたのを、父が寺の裏山の木を売って救いに来た。二回目は念願の詩集『あこがれ』上梓にこぎつけたが、この間に父が宝徳寺の住職を罷免されたので、啄木の前途は暗澹とした。東京から帰るにも金なく、仙台の土井晚翠夫人を騙して金を借り、一週間ほどの宿の払いまで押しつけた。自分の結婚式にも欠席する始末。石川家の没落を聞いていたろうに、節子の父が娘の婚約解消をしなかったのは不思議だ。よほど節子が啄木に夢中になっていたのだろう。それでも啄木は寺を追われた父母妹と新婚の妻と自分と五人の生活を、東京の与謝野夫妻のような詩人的生活として、盛岡で切り開こうとしたが、駄目だった。時代が違ったし、盛岡は東京でなく、啄木は鉄幹でなく、節子は晶子でなかったから。『明星』に代わる『小天地』は一号で潰れ、後には莫大な借金が残った。で、父は野辺地へ、妹はキリスト教の女教師にあずけ、息子を離れぬ母と妻と三人、渋民へ来たのだ。

街道筋の南から十軒目、斎藤佐蔵方の表座敷だ。

「不取敢机とりあへずを据ゑたのは六畳間。畳も黒い、障子の紙も黒い。壁は土塗りのま、で、云ふ迄もなく幾十年の煤の色。例には洩れぬ農家の特色で、目に毒な程焚火の煙が漲って居る。この一室は、我が書斎で、又三人の寝室、食堂、応接室、すべてを兼ねるのである。あ、都人士は知るまい、かゝる不満足の中の満足の深い味を。」

妻への鈍感さ。田園詩人ぶつてもいる。が、どん底に落ちたという気持ちであろう。だから数日後、師の鉄幹に報じている、「人知らぬ逆運の鎖につながれて動きも成らぬ私」実は一ヶ蒼白なる生活場裡の敗亡者に候」と。これからは詩筆をみがく、小説も書く、著述もする。

教鞭もとる。「月給八円の代用教員！ 天下にこれ程名譽な事もあるまじく候が、」自分のような立派な詩人が！という皮肉である。このように現実の直視からすぐに自己肯定に転じ、自己流の教授法をやる、イヤになれば何時でもやめることは承知させてある、私としては児童の心理研究をするのだ、村では信用も勢力もあるから、「たとえ俸給と席次が末席でも一村の教育に就いては、思ふまゝになる次第」と師に向つても虚勢を張り、大風呂敷を拡げてしまふ。だからこそ逆境と貧乏にも負けなかったのかもしれない。

彼が教壇に立った渋民小学校は小さな学校で、高等科担任の校長、三、四年担任の古手の教員、一年生担任の若い女教師、それに代用教員の啄木だから、啄木は尋常二年生の担任で、がっかりしている。自分は読み方とか算術とかを教えるのでなく、自分の「心の呼吸」を故山の子弟の胸にふきこみたいのだから、十二、三歳から十五、六歳までの「人の世の花の蕾の最もふくよかに育つ時代」高等科の子供でなくては駄目だ、「尋常科の二年といえ、まだホンの頑はない孩提に過ぎぬ」ではないか、と大不平だ。

「しかし、彼等の前に立った時の自分の心は、怪しくも抑へがたなき一種の感激に充たされるのであつた。神の如く無垢なる五十幾名の少年少女の心は、これから全たく我が一上一下する鞭に繋がれるの

だと思ふと、自分はさながら聖いもの前に出た時の敬虔なる顫動を、全身の脈管に波打たした。不整頓なる教員室、塵埃にみちみたる教場、顔も洗はぬ垢だらけの生徒、あゝこれらも自分の目には一種よろこばしき感覚を与へるのだ。学校は実に平和と喜悅と教化の大王城である。イヤ、是非さうせねばならぬ。」

二十五日に学校で怪我をして右の足が不自由になつたが、チンバを引いて一日も休まずに出勤した。「生徒が可愛いためである。あゝこの心は自分が神様から貰つた宝である。」

二十六日から高等科生徒の希望者へ放課後課外に英語教授を開始した。二時間乃至三時間位つゞけ様にやつて、生徒は少しも倦んだ風を見せぬ。二日間で中学校で二週間もかゝつてやる位教へた。始めの日は二十一名、翌日は二十四名、昨日は二十七名、生徒は一日とふへる。

英語の時間は、自分の最も愉快な時間である。生徒は皆多少自分の言葉を解しうるからだ。自分の呼吸を彼等の胸深く吹き込むの喜びは、頭の貧しい人の到底しりうる所でない。」

「頭の貧しい人」とは校長のことだ。「余は余の理想の教育者である。余は日本一の代用教員である。」この「日本一の代用教員」は日記だけでなく、評論でも小説でもしばしばくり返している。その裏には自分は詩人で、詩人だけが真の教育者だという自信があつた。

六月の初め父の宝徳寺再住問題から、村内の対立が激化し、「宗教、政治、教育の三方面に火の手をあげて渋民村を黒煙に包んでしまつた。」このことは後述するが、フランス革命のようだと啄木は言う。ついで

六月十日からの田植え休みに啄木は上京して新詩社に遊ぶ。(父のための運動もしたらしい。)

「近刊の小説類も大抵読んだ。夏目漱石、島崎藤村二氏だけ、学殖ある新作家だから注目に値する。アトは皆駄目。夏目氏は驚くべき文才を持つて居る。しかし「偉大」がない。島崎氏も充分望みがある。「破戒」は確かに群を抜いて居る。しかし天才ではない。革命の健児ではない。兎に角仲々盛んになった。が然し……然し、……矢張自分の想像して居たのが間違つては居なかつた。『これから自分も愈々小説を書くのだ。』といふ決心が、帰郷の際唯一の予のお土産であつた。」

群雄の中から漱石、藤村を見抜く啄木の批評眼はさすがである。

「休暇中盛岡に行つて居た妻と、汽車に乗り合して、滝沢から下車して夏の木蔭の一里の路、閨門に入つて出迎ふ四五の児等を見た時は、十日の間忘れて居た或る高潔なる感情の遽かに泉の如く胸に湧くを感じた。」

まだ新婚の妻の愛らしき。子供に会つてよみがえる教師らしい気持。こうして書いたのが「雲は天才である」。むろん「吾輩は猫である」の模倣だが、吾輩は犬であるなどと比べると気がきいている。

夏には童話俗謡の調査、『小天地』の委託金費消の嫌疑で検事局へ出頭、お蒼前さまの祭。盆踊りに「教育者は、学校生徒は踊をおどつては可い」と云ふ。しかし予——乃ち代用教員は、卑穢な歌は悪いが、盛んに踊るべしと教へた。踊は田舎一年中の最大快樂である。『自分も或る少女から単衣、帯、編笠を借りて踊つたという。ドイツ語を始め、

小説の構想を並べる。十月には女教師の上野さめ子が去つて堀田秀子が来る。『自宅で朝読を始めた。男女二十人許りの生徒が、夜のまだ明け放れぬ頃から、我先きにと集まつて来る。』学校では、「高等科の地理歴史と作文とを併せて受持つ事になった。』学科担任制を始めたのだ。ここでも「高等科の生徒は非常に喜んで居る。予は代用教員として成功しつゝあるのだ。」という。

十一月には小説「葬列」を『明星』へ送つた。するとお座のため盛岡の実家へ歸つて居る妻から手紙が来た。これは啄木の小説が夏子という「狂女」と或る精神薄弱の男の話なので——啄木は珍らしい話を書くのが小説だと誤解していた。——彼らのことならこういうことも書けばおもしろい、こういう話もある、と言つたあと、

「……………いかに値ある御作なるべきかなど、早や自分のものの様に自惚気にも成申候、かくては私も、二つ並べて見劣りせぬ位の子生まねばならぬと思ひ居候。……………私は君を夫とせし故に幸福なりと信じ、且つよろこび居候、生るるは京ちゃんにて候ふべきか。まちどほしく候ふかな。」

十二月五日夕、なつかしき啄木様み許に。せつ子。」

後には啄木との生活のためにボロボロになる節子だが、まだ可憐な心の姿を啄木の日記に残している。

十二月始めには「林中書」を脱稿して、「明治の教育界に投ぐる爆裂弾!」と言つた。父の宝徳寺再住に吉報が来たので、父の方がきまるのが先か、自分が「若きお父さん」となるのが先か、と待つたが、十二月三十日に京子が生れた。

ところが一月七日三学期の始業式には「予の代用教員生活は恐らく数月にして終らむ。」とある。宮沢賢治もそうだが、生命の短い人は同じことを何年もしていない。内部にこうしてはいられない、早く早くとせき立てるものがあるのではないか。それと、実は渋民に來たには隠れた理由があった。林中でエネルギーを蓄え文学上の再起を計る、日本文明の革命のために教育の足を切る、だけではなかった。宝徳寺の住職を罷免された父の再住のためでもあった。これについては少し長くなるが岩城之徳の説を引用する。

「さて啄木が故郷に帰ってまもなく、この不幸続きの一家にも思わぬ朗報が舞い込んできた。それは父親の石川一禎に対して曹洞宗宗務院より明治三十九年宗令第二号をもって、懲戒赦免の恩典が通告されたのである。明治三十九年三月二十三日の啄木日記にもこのことにふれ、「川口村明円寺の岩崎徳明より、曹洞宗特赦令の写し、送り来る。早速野辺地へ送る。」と記載されている。この通知は住職復帰の可能を意味するものであったから、青森県野辺地にいた父親は、この吉報を得て四月十日倉皇として渋民村に帰って来た。

啄木の父が宝徳寺を退去したあと、盛岡の久昌寺の住職海野義岳の推挙で、下閉伊郡船越村海蔵寺の徒弟中村義寛が代務住職として赴任して寺務一切を取扱い、三十八年十一月には正式に檀家総代名をもって、義寛の住職継目願書が岩手県第一宗務所長に提出された。しかし書類不備のため曹洞宗宗務院への提出がおくれていたとき、先住石川一禎の懲戒赦免が発令されたのである。

啄木の父が帰村したとき宝徳寺住職問題は右のような事情のもと

に置かれていたので、ここに檀家間には中村義寛を推す一派と、石川一禎を推す両派を生じたが、関係者協議の結果ひとまず曹洞宗本山特赦の慈慮に従うことになり、一禎再住の件が決定し、岩手県第一宗務所へ提出中の義寛の継目願は撤回された。しかし宗務所で書類の調印を取消さずそのまま檀家総代に渡したので、中村義寛はこれを利用し、ひそかに反石川派の総代を煽動して、継目願書を直接宗務院へ提出、久昌寺の海野義岳や海野扶門の支援を得て、石川一禎追出しの工作を策したのである。

中村義寛の提出した願書は正式のものではなかったが、関係者の調印のある完全なものであったから宗務院に受理され、このため宗務当局も石川・中村いずれを許可すべきかその処置に悩み、一方檀家間でも義寛の運動が功を奏して再び両派に別れて対立、爾後檀徒間ニ石川再住派ト中村推薦派トノ兩派起リ、互ニ我意ヲ主張シ本院ノ手数料煩ラハスコト尠カラス」(曹洞宗宗務院所蔵「岩手県第一宝徳寺後住特選ノ件」)という紛争に発展し、さらにこの住職の地位をめぐる村内有力者間の争いとなり、これに結びつく啄木の小学校追出しの工作など、まさに啄木の表現をもつてすれば、「かくて我が一家を——つまり予を中心とした問題が、宗教・政治・教育の三方面に火の手をあげて渋民村を黒煙に包んでしまった。」という村全体の騒動に発展し、これが一年近くも続いたのである。

しかし啄木の父は次第にそうした村の空気に堪えられなくなり、また赤貧洗うがごとき一家の生活を見かねてついに宝徳寺再住を断念、明治四十年三月五日の未明、家族に無断で家出して野辺地の常

光寺に師僧対月を頼った。」

父の再度の家出によって復帰は不成功に終ったと岩城は言うが、駄目と見きわめがついたので父は家出したとも思われる。いづれにせよこれで啄木が浪民に居ねばならぬ理由がなくなった。その上月給八円ではいくら物価の安い田舎でも一家五人の暮らしは出来ない。十年前前に漱石が松山中学へ行った時独身で月給八十円であった。それから二度の戦争と物価の高騰がある。部屋代は払わず、漬物と味噌汁だけでも八円ではやっていけなかった。遊びに来た子供に、おいこの風呂敷を持って工藤さんから米一升取って来い、と命じて、一家で食わずに早く寝てしまう日もあったという。

「予の代用教員生活は恐らく数月にして終らむ。予は其間に出来るだけの尽力を故山の子弟のためにせざるべからず。新春第一に先づ予の遂行せむとする計画二あり。生徒間に自治的精神を涵養せむとする其一也。兎角田園にまぬかれ難き男女間の悪風潮を一掃して、新らしき思想を些少なりとも呼吸せしめむとする其二也。

このためには、先づ「生徒間の制裁」を起さしむる必要あり。又愛しき子弟の数人を犠牲とせざるべからず。予は今日よりこれに着手したり。」

二の「男女間の悪風潮」とは夜這いの風習などであろう。それを止めさせ青少年の間に純潔の習慣を作ろうとしたのだ。それには懺悔を要求した。

「愛憐の情は油然として予が心頭に湧きぬ。『我も爾の罪を定めず、往きて再び罪を犯す勿れ。』!!! 然れども予は思へり、たとへ愛しき

子弟の数人を、よしや、其犠牲とするとも、予は断じて此悪風を一掃し了らざるべからずと。これ実に唯一校の面目にのみ関するものにあらざして、其成敗は深く永く社会の推移を司配すべき問題なればなり。

目に涙充ち、声おのづから顫へる美しき愛しき自白者は続々として予の面前に立ちぬ。彼等は皆、殆んど噴飯すべき程の些細事に至るまで、自ら悪しと思へることは総て懺悔しぬ。而して極めて敬虔なる湿める眸をあげて、切に予のゆるしを乞へり。あゝ予は何の心を以てかよく彼等の雪よりも潔き心を罪に定めん!

一人あり、善吉と呼ぶ。年齒僅かに十二歳、学科の成績平常の素行極めて優等にして今、高一年の級長たり。彼偶々一女友のあやまる所となりて、近時較々幼年求学者の道を迷ふ。彼は今日一日、殆んど一語を発するなく、病める人の如く打沈みて、予の顔を見上ぐる事さへ能はざりき。夕刻となりて予は学校より帰り来れり。彼は直ちに駆け来つて予を訪へり。予の顔を見るや、彼が尽日の辛き悔悟は忽ちに発して滝の如き涙となりぬ。さて力ある言葉に懺悔すらく、『先生、私は悪うございました。』……………」

学科の勉強だけでなく、児童を通して世の中を改良すべく働きかけている点がすごい。啄木は、彼の書くものによると、児童に対してほとんど絶対的支配者のごとく、ほしいままにマインド・コントロールもしたようだ。

一の自治的精神の涵養は、卒業生送別会を生徒の自治でやらせたことだ。校長は留守、天気はよしで生徒は喜んだ。接待係、余興係、会

場係、会計係、皆生徒。生徒から出した委員長の招待状によって村の紳士貴女十数名臨席された。

「卒業生演説もすみ、来賓演説となつたが、互に相譲つて仲々出る人がない。突如、会場係長は立つて、「只今金矢さんのお話がありますから、皆さんお静かに」と紹介した。郡参事会員金矢氏の狼狽した顔の面白さ、予は会場係長が、喰つて了ひたい程可愛かつた。……

予が特に、この日の会のために作つて与へた『別れ』の歌、高等科女生徒五人の合唱には、堀田姉のオルガン、予のヴァイオリンの伴奏で、この日最も美しい聴物であつた。」

歸りに役場に寄ると助役が、「今日の生徒の活動には涙が出る程うれしかつた。」と言つた。啄木は誰に教つたのか、中学時代の経験か、旧制高校の自治を小学生にさせ、時代を先取りしている。

村の青年を集めて夜学を始めた。ところが木造のぼろ校舎、各の寒風が吹きこみ、流感にかかつて一週間ほど休んでいる。どれもこれも素人らしい教育を思いきつてやつた。

当時教わつた子供が後で思い出を書いたり、座談会に出てしゃべつたりしている。その一つ、昭和二十九年二月に、岩波の新書版『啄木全集』の別巻『啄木案内』のための座談会に柴内栄治郎君が、

「ふしぎなことに少年時代ではありませんけれども、割合にあの一カ年の教わつた時代のこと現在もなお頭に相当残っているものでありまして、この點から考えますと、先生が偉大な教育者であり、大きな感化力をもつておられたというように私感しているわけです。それで今までの出版せられましたいろいろの先生の本などにつきまして

も、まったく私は拝見しておりませんので、ほんとうに十三、四歳のときに受けた記憶そのものより存じておらぬわけであります。」

とことわりながらいろいろ話している。高等科の生徒の希望者にナショナルリーダーで英語を教えたこと。作文は、

「私は偉いなと思つたのは、今日は先生が作つてみんなに見せようというわけで、題は何でもよいからお前等の方から出せといつていろいろなものが出たのです。……お盆の近づいた日であつたのでお盆のことについて書いてもらおうという、さつそく黒板に書く、その文章が實に子供心にもよい文章であると思つた。それをうつしたのが家にあつた筈ですが——。」

この柴内君は家が好摩駅の近くだったので、駅前のポストに手紙の投函を頼まれた。行くと、その場で書く。部屋は夜具が隅に積んであつて行李があつて、小さな机、外国語を習つておられた。それから壁障子、羽織の裏まで歌が書いてあつた。学校に出勤する時、玄関から入ってくる姿が残っている、秋から春までは衿巻を二つに折つて、片方に通して、紋付羽織、袴で、「多くはヴァイオリンを片方に持つて、悠々と入ってくる。」「吾輩は猫である」にも寒月のヴァイオリンがしばしば登場するから、これは当時流行の最先端だつたのだろう。

「先生はほとんどいつも同じ着物ばかりで、あかがついてピカ／＼光っているのを着ている。ところがそのころ、東京に出かけられたと云う記憶がありませんが、休みにどこかに出かけて帰つてくると、新しいものを着てくる。これは有名でしたね。」

聞いていた野村胡堂が「端悦すべからざる男ですね。」と言う。容貌は

目が凹んで相当眼光がある、青白く痩せたが、胸を張って威張って歩く。

学校をやめる時は子供たちにストライキをさせて校長を追い出し、自分も免職になった。教育の現状への不満を校長への不満として排斥して自分もやめる、詳細を日記にかくつもりで、空けておいて書かなかった。

柴内君はこんな風に記憶している。

「朝に私が登校し門から入ると、数名の生徒が校舎に入らんで、運動場の道路側の柵の所に立っておった。そこに、立花慶三という、相當できる生徒でしたが、この生徒が私等の所に來て、今日、一さんが、平田野に遊びに連れて行くという話になっているから、行くんじゃないかという相談を受けた。それから「辨當をどうするのだ。」と言うと「辨當を持って行くのだ。」と言う。私もそこに立っておったところ、だんだん集って、そうですね、三十人ぐらいになったでしょう。高等科の生徒が、学校の始まるころでしたね、門を入って右側の隅に柵の壊れた所があった。そこから出かけた記憶があります。」

先生は後から来たようだという。

「小高い松の木が生えている野原ですが、そこに行つて、相撲をとったり、いろいろ駆けまわつて遊んでおったのです。昼になって辨當を食べた。あとはもう帰ろうじゃないかと言って帰つたのです。……しかしそのことを思い出すと、これはただ事じゃないといった気持はあった。私は學校に立寄らずに、その日は家に帰つた。」

向うで歌（啄木のストライキの歌）は歌つた。自分のクラスの生徒だったら課外授業になつてストライキにならないが、校長の受持の生徒を連れて行つたからストライキになった。その晩臨時村会が開かれ、翌日郡長が來て生徒を集め、お前達は三つの恩に背いた、天皇陛下、先生、親の恩だ、とひどく叱つたが、啄木が悠然とそっくり返つて笑つていたので、生徒たちは少しも怖くなかつたという。

*

教師としての啄木を知るための材料で日記に次ぐものは「林中書」である。盛岡中学校校友会雑誌に出したこの書簡体のエッセイは、啄木の作物中十指の中に入るくらいの傑作だと思う。まず自分は盛岡中学の「七月児」なる半途退学者で最下級の校友、「今、みちのくの林中の草の根方に転がつて居る石塊だ！」と名乗りをあげる。夢想家だが、「代用教員といふ最下級の教育家の一人」でもあるから、日本の教育について感想を書くと言いながら、日本文明の總批判をする。日露戦争に勝つて一等国になったと自惚れる日本に、「戦争に勝つた国の文明が、敗けた国の文明より優つて居るか^{どう}か？」と問う。イプセンも言うように、露西亞の農民こそ自由の民である。「日本人は近代の文明を衣服にして纏ふて居る、露人は之を深く腹中に藏して居る。」トルストイは露西亞に生れた。華やかな明治の文物よりも幾度となく監獄の門をくぐつたゴルキイの方が、文明の爲めには祝すべきだ。露西亞は偉大だ。（これは啄木の持論で、三十七年の「洪民村より」でも「敗れたる国の文明果して劣れるか、勝たる国の文明果して優れるかと叫べるニイチエの大警告」に立派に應えてすぐれた文明を作つたビスマルクを讃え、

比べてトルストイ、ゴルキイ、アレキセーフ、ウキツテを有する戦敗国の文明に対して日本人は「後へに瞠若たるの点なきや」だから今、天才が出現しなければならん、と言った。勝った日本より負けた露西亜が偉い、はこの頃から啄木の口ぐせだった。今の日本人は、多弁にして自負心多き小児にすぎないと言う。わたしは啄木の文明批評家としての明に驚嘆する。三十七年の段階で既に日本人が「再び正義の名を借りて干戈を動かしむるの時に立ち至」ることも、その結果の大敗北も予見していたようなのだ。

自分の経験、学生としての煩悶は「教育の価値」を疑わせた、と啄木はいう。教育の真の目的は何か？ 天才を養成することである。なぜなら世界の歴史から大人物を抜き去ったら、醜惡な死骸しか残らないから。

「教育の真の目的は、「人間」を作る事である。決して、学者や、教師や、事務家や、商人や、農夫や、官吏などを作る事ではない。何処までも「人間」を作る事である。唯「人間」を作る事である。これで沢山だ。」

ところが現在ではますます細分化が進んで、学者や、教師や、事務員や、商人や、農夫や、官吏を作ることは勿論、その中をさらに細分化して、例えば学者の中でも、日本文学の研究を作ることとなり、その日本文学の研究も時代に、ジャンルに、作家に、特殊研究に分かれ、その研究者の書くものも、同業の研究者を目当てに、研究者が読むためにのみ書くという具合に、完全にタコツボ化している。広い場所、普通の人を目あてに書く、ということがなくなつた。

啄木は教場で教材を教えるだけの教育者に反対し、その平均点主義に反対する。

「曰く、日本の教育は、凡人製造を以て目的として居る。日本の教育は、其精神に於て、昔の寺小屋教育よりも劣つて居る。日本の教育は、人の住まぬ美しい建築物である。別言すれば、日本の教育は、「教育」の本乃伊である。天才を殺す断頭台である。」

本乃伊とは血が通っていないことだろう。そして最後に、諸君に、と言って中学の後輩に、教育の足を切れ、足は小学校だ、小学校の代用教員になれ、とすすめる。

「曰く、諸君が中学を卒業して他の学校に入らむとすれば、僅か百人足らずの定員へ何千人といふ応募者が現はれる。それらと競争して勝たうとするには、勢ひ百科全書的な勉強を少なくとも一年位やらねばなるまい。そんな下らぬ勉強をすると、かの怠惰者と同じく進むも退くも人生に些の影響なき壊れた時計となるではないか。それよりは、今日の日本の小学教師に三万人の不足がある。此の不足は十五ヶ年の後でなければ補充する事が出来ぬと、恥かし気もなく当局者が云つた。何と諸君、諸君は此空席に向つて突貫する勇氣はないか。そして予と共に、かの神の如く無垢なる、然も各々或る特長を具へた幾十といふ少年少女の顔を、教壇の上から一瞥して見玉へ。其一刹那に、諸君は、三十年の百科全書の勉強よりも優る、一の或重大なる教訓を得るであらう。そして或極めて嚴肅な、恰も神の審判の庭に引き出された様な感情の、渾身に漲り渡る感ずるであらう。その時は乃ち、諸君が一躍して『理想の戦士』といふ肩書を貰

つて、天帝の近衛兵となる時であるのだ。どうか、諸君、諸君は伴食大臣よりも代用教員の方が豪いと感じないか。僕が斯ういふと、諸君の大多数は恐らく大憤怒する事であらう。然し諸君、諸君に怒る位の元氣があるなら、どうか壊れた時計にはなつて呉れるな。」

伴食大臣とは親分のお伴で大臣にありつく人間である。そして自分のことを、間もなく代用教員を止め、再びコスモポリタンの徒となつて、胸に渦巻く考えを論文とか小説とか戯曲とか詩とかに書き分け、中学の西洋史の先生もし、俳優となつて舞台から挨拶するかもしれぬ。そして最後には再び帰り来つてこの林中で代用教員をやる予定である、と言う。本音だろう。理想の学校でも作る時は寄附をたのむと諧謔して終っている。

教育とは天才と人間を作ることだと理想を示し、今の教育を倒すには足を切れと戦略を示し、教師啄木と革命思想家啄木とが萌芽としてイメージとして重なることを示したおもしろいエッセイであると思う。

＊ ＊

教師としての啄木の第三の材料は「雲は天才である」だ。日記に、「七月になつた。三日の夕から予は愈々小説をかき出した。『雲は天才である。』といふのだ。これは鬱勃たる革命的精神のまだ混沌として青年の胸に渦巻いてるのを書くのだ。題も構想も恐らく破天荒なものだ。革命の大破壊を報ずる暁の鐘である。主人公は自分で、奇妙な人物許り出てくる。これを書いて居るうちに、予の精神は異様に興奮して来た。」

とあるように、自分を主人公にして経験に尾鰭をつけて理想的に仕あ

げ、情熱的に書いていったので、「書いて居るうちに、異様に興奮して来た」はさもあらんと思われる。小説はこんな具合である。

「この課外授業といふのは、自分が抑々生れて初めて教鞭をとつて、此校の職員室に末席を漬すやうになつての一週間目、生徒の希望を容れて、といふよりは寧ろ自分の方が生徒以上に希望して開いたので、初等の英語と外国歴史の大体とを一時間宛とは表面だけの事、實際は、自分の有つて居る一切の智識、(智識といつても無論貧乏なものであるが、自分は、然し、自ら日本一の代用教員を以て任じて居る。)一切の不平、一切の経験、一切の思想、——つまり一切の精神が、この二時間のうちに、機を覗ひ時を待つて、吾が舌端より火箭となつて迸る。的なきに箭を放つのではない。男といはず女といはず、既に十三、十四、十五、十六、といふ年齢の五十幾人のうら若い胸、それが乃ち火を待つ許りに紅血の油を盛つた青春の火蓋ではないか。火箭が飛ぶ、火が油に移る、嗚呼そのハツ／＼と燃え初むる人生の烽火の煙の香ひ！ 英語が話せれば世界中何処へでも行くに不便はない。たゞこの平凡な一句でも自分には百万の火箭を放つべき堅固な弦だ。昔希臘といふ国があつた。基督が磔刑にされた。人は生れた時何物をも持つて居ないが精神だけは持つて居る。羅馬は都府の名で、また昔は世界の名であつた。ルーソーは欧羅巴中に響く喇叭を吹いた。コルシカ島はナポレオンの生れた処だ。バイロンといふ人があつた。トルストイは生きて居る。ゴルキーが以前放浪者で、今肺病患者である。露西亞は日本より豪い。我々はまだ年が若い。血のない人間は何処に居るか。……あ、一切の問題

が皆火の種だ。自分も火だ。五十幾つの胸にも火事が始まる。四間に五間の教場は宛然熱火の洪水だ。自分の骨露はに瘦せた拳が礎と卓子を打つ。と、躍り上るものがある、手を振るものがある、万歳と叫ぶものがある。完たく一種の暴動だ。自分の眼瞼から感激の涙が一滴溢れるや最後、其処にも此処にも声を挙げて泣く者、上気して顔が火と燃え、声も得出さで革命の神の石像の様に突立つ者、さながら之れ一幅生命反乱の活画図が現はれる。涙は水ではない、心の幹をしぼつた樹脂である、油である。火が愈々燃え広がる許りだ。『千九百〇六年……此年〇月〇日、S——村尋常高等小学校内の一教場に暴動起る』と後世の世界史が、よしや記さぬまでも、この一場の恐るべき光景は、自分並びに五十幾人のジャコビン党の胸板には、恐らく「時」の破壊の激浪も消し難き永久不磨の金字で描かれるであらう。」

こんな授業をしているのだが、本日六月三十日は校長の命令で不本意ながら授業は休み、出欠席の歩合を計算することになって、小使室に棲む校長夫人「馬鈴薯に目鼻よろしくといふマダム田島の御機嫌をとった」結果となり、真につまらないことだという。教員室で皆が算盤の珠をパチパチいわせる音は、ダンテが地獄で聞いた「パペ、サタン、パペ、サタン、アレツペ」ではないか。啄木は『神曲』など何時読んだのだろう。校長の顔の醜悪を描いて、鼻下の八字髭の光沢が無いのは人物に活気のない証拠、鰻のその如く垂れ下ったのは向上を忘却した精神の象徴、「亡国の髭だ、朝鮮人と昔の漢学の先生と今の学校教師にのみあるべき髭だ。」後に「地図の上朝鮮国にくるぐろと墨をぬり

つつ秋風を聴く」と歌って日本の朝鮮併合を怒り、朝鮮人を悲しんだ啄木でさえ、当時は世の朝鮮人蔑視を疑っていない。

さて小説はそういう自分が校長の許可などむろん貰わずに自作の詩を子供たちに歌わせているので、校長と古手の教員が教授細目を持ち出して文句をつけるのを、逆に言い負かす、若い女教師が味方して。子供たちも勿論味方だ。

こうして自分を英雄化するが、一人ではどうしても小説の幅が狭くなるから、別の英雄も立てる。それが後半で、独眼竜でヒョットコ、しかし声はナポレオンの乞食が、紹介状を持って自分を学校に尋ねてくる。どうしようと言ひ顔の小使に「お通し申せ」と命じる。乞食なんぞを、とわめく校長夫婦を尻目に、乞食の話を聞く。

石本という八戸の男で、父が死んだという知らせに、乞食をしながら静岡の先まで帰る途中なのだ。彼は八戸の年のいった中学生で、自分の旧知の天野朱雲と親しく、その天野から、何とか力になってやってくれと手紙を添えてよこしたのである。天野とはこうこうして知り合い、こうして別れて来たと石本は語る。話の中で英雄が活躍する。

「天野君は確かに天才です。豪い人ですよ。今度だつて左様でせう、自身が遠い処へ行くに旅費だつて要らん筈がないのに、財産一切を売つて僕の汽車賃にしようと云ふのですもの。これが普通の人間に出来る事ッてすかね。さう思つたから、僕はモウ此厚意だけで沢山だと思つて辞退しました。それからまた暫らく、別れともない様な気がしまして、話しますと、「モウ行け。」と云ふんです。「それではすでにお別れです。」と立ち上りますと、少し待てと云つて、鍋の飯を

握つて大きい丸飯を九つ拵へて呉れました。僕は自分でやりますと云つたんですけれど、「そんな事を云ふな、天野朱雲が最後の友情を享けて潔よく行つて呉れ。」と云ひ乍ら、涙を流して僕には背を向けて孜々と握るんです。僕はタマラナク成つて大声を揚げて泣きました。泣き乍ら手を合せて後姿を拝みましたよ。天野君は確かに豪いです。アノ人の位豪い人は決してありません。……（石本は眼を瞑ちて涙を流す。自分も熱い涙の溢るるを禁じ得なんだ。女教師の啜り上げるのが聞えた。）

ここでもやうやく本筋に戻っている。英雄があちこちに出現して、素朴な力強さはあるが、小説としてはまとまりのつけようがなくなる。これが啄木の小説作法だった。

自分は日本一の人物で、子供たちに慕われ、若い女の人望も得ている、これを書きたいが、自分だけでは足りないからもう一人、すばらしい豪傑を書き加えたい、これが啄木の小説の作り方だった。北海道時代のことを書いた「菊池君」がそうだ。『朝日』の校正係の自分を記者に直して書いた「我等の一団と彼」が題名からしても、そうだ。その結果は小説に核が二つ出来てしまい、統一した印象を結ばなくなってしまうのだが。

「雲は天才である」は、洪民という小天地に天下の英雄豪傑が集ってくる、そこを書きたかったのである。

それにつけても当時読民のような田舎の村で、子供たちは新刊の、あるいはそれに近い小説本などほとんど持たないし、読まなかったであろうと思われるのに、そうでなかった。啄木は子供から借りたとい

つて押川春浪著の英雄小説『新日本島』を読んでいる。（日記、四十年一月六日）

英雄美人が雲の如く集つて「東洋団結」の旗印の下、大活躍をする。「東洋団結」これこそ当時の日本の民権、国権論者の理想だった。東洋が団結して西洋の侵略に抵抗するとは、後の「大東亜共栄圏」の元になった思想で、あれほどには思いついていなかった。「支那海の南隅に新日本嶋あり、印度洋中に朝日嶋あり。亜弗利加東岸に海光国あり。」それぞれ海南島、セイロン島、マダガスカル島のようにである。「空中飛行艇あり、海底戦闘艇あり、幾百隻の大戦艦あり。」第二次世界大戦のようである。豪傑中の豪傑、大西郷は西伯利亚の怪塔に幽閉されている。この老英雄の救出される時、豪傑たちは一斉に立つて世界を粉碎するのだ。

啄木は、これは荒唐無稽の物語だけれども胸中清風を生ずるのは「男性的」だからだ、自分も英雄小説を書きたい、が自分の書きたいものは武闘ではなく、「人間」思想するが故に生ける人間、だと言う。啄木流豪傑の根本は、世と戦う思想だった。「雲は天才である」のねらいもこれだろう。

さて教師としての啄木に、どんな意味があるのか。戦時下抵抗の記録たる生活綴方運動あるいは北方教育の先駆であるという評価をはじめ、さまざまな評価があるが、啄木が素人らしい教育を思いきってやったことは、洪民という東北の僻村の子供たちに新しい世界を切り開いてみせたのではないか。

上にもあげたギリシヤ、キリスト、ローマ、ルーソー、ナポレオン、

バイロン、トルストイ、ゴルキー、負けた露西亜の方が勝った日本より豪い、だから日本に天才が出なければならぬ、……これらは子供たちに完全にわかったとは言えないが、さりとて全然わからなかったとも言えない。『文学のなかの教師』⁽⁸⁾という本の中にある、「新しい世界を切りひらいてみせた」という言葉が、啄木の仕事を語るには一番いいと思われる。

「教師は自分が、自分の手で苦勞して耕やし拓いたもの以外を、本質的には生徒に与えることは出来ない。」(同上)彼は机上の勉強だけでなく、生活を通して生きる上に大切なのはこれだと信じたことを子供たちに伝える、そのことで彼らに新しい世界をきりひらいてみせる、啄木もそれをしたのではないか。そしてこの二十六年の生涯中の一年間の貴重な体験は、逆に啄木にも影響して、その文学の養いになったと思う。

賢治も、教師をした。県立花巻農学校で、大正十年十二月から十五年三月まで四年四ヶ月の間。時代も違う、学校の性格も生徒の年齢も違うが、素人らしい教育を思いきってやったことは同じである。それはたとえば畑山博の『教師宮沢賢治のしごと』や、写真塩原日出夫、文鳥山敏子の写真集『先生はほーっと宙に舞った』などに書かれている。例えば前者は、賢治に教わった生徒からの聞き書きを再構成したが、農業でも代数でも英語でも、ほとんど教科書を使わない授業だった。

土壌学は、波によって風のために、岩は土になる。土の堆積に植物が生える。動物が生れる。生きものたちが、生を生きて、やがて死ぬ。

「死んだものたちの亡骸を土の層が包む。死ぬというより、もしかすると『休む』という方が、生命のありようとしては適当かもしれない。」土壌とはだから、生命のゆりかごのこと、だと賢治は言う。細胞核は、その中の仁は、地球が始ってからのずうっとの歴史を覚えている、と言う。これを覚えていたのは瀬川哲男君で、水素ガスの分子が一秒間に他の分子にアタックする機会は一億億回、そんな細胞の集まりが人間だから、人間とは細胞が集ってやっっているお祭りなんだ、と賢治は言う。鳥山らの本では瀬川君はこうも言う、人間は無意識から生れる、無意識が本当の生命の力だ、と宮沢先生は言った、と。どの話も科学と宗教の一致を暗示するようだ。その他自作の学校劇、野外実習、ダンス、レコード鑑賞、オーケストラ等々に力を入れた。

賢治は直接生徒に与えたのではないが、農学校教師時代を思いつけた詩の下書稿「生徒諸君に寄せる」の一節に、革命がくる、と言ったあと、

諸君はこの時代に強ひられ率ゐられて
奴隷のやうに忍従することを欲するか
むしろ諸君よ 更にあらたな正しい時代をつくれ
宇宙は絶えずわれらに依って変化する

といい、「新しい時代のコペルニクスよ」「新しい時代のダーウキンよ」「新たな詩人よ」「新たな時代のマルクスよ」と、生徒たちの時代の来るべき天才たちに訴えかける。啄木が農民の子等に、ルーソー、ナポレオン、バイロン、トルストイらを挙げたのと似て、新しい世界をひらいてみせたのだ。鳥山の本で、酒造りの川村与左衛門君は「雨ニモマ

ケズ」と書いた壺を出して、「普通の酒も、この中に入れると特別の酒になるんです」と言って大笑いしている。賢治や啄木に教わると特別な人間になってしまう滑稽を語って象徴的だ。今年は生誕百年ということで賢治の元生徒たちも引張りだこ、「今日も栗餅だ」とニコニコ、テレビ・カメラの前に出てくる姿も親しい。鳥山の本に戻ると五内川佐君は、雨に降られた山からの退却に、鮭の缶詰を買って鮭ご飯作ってご馳走してくれた賢治先生を「お金のことなんか構わない人だからねえ、」と暗に批評した。こういう批判も交っていると本は楽しいし、この点はお金の無かった啄木とは正反対だ。時代の差、土地の差、子供の年齢差を考えると、教師としての賢治と啄木は五分と五分、互角というところであらうか。

本稿は平成八年（一九九六）一月から三月までの土曜日毎に六回、富士見市立中央図書館で開かれた富士見市市民大学で話したことをもとに書かれたものである。なおこれは前半であって、後半は、

四 北海放浪の歌——賢治の北方行と比べる

五 「ローマ字日記」の頃——賢治の暗号と比べる

六 飛行機の詩——銀河鉄道と比べる

である。注文があればどこにでも書くが、なければ本紀要に登場するかもしれない。

注

(1) 小沢恒一「ユニオン会と啄木」(岩波書店版新書版啄木全集別巻『啄木案内』昭和二十九年)

(2) 平岡敏夫「啄木——近代文学における位置」(『短歌』平成七年四月号)

(3) 『ことばの花束』(岩波文庫) 四十二頁。ただし「宇宙」は「宙宇」とある。他の本によつてなおす。「ひまがあるのか」とある本もある。なおさず。

(4) みんなの本当の幸せを求めるとは、例えばシマウマを食うライオンの幸せと、ライオンに食われるシマウマの幸せが一致することだろう。井上ひさしも畑山博も自然の大循環に従うということとこれを肯定するようだが、現実には、時を狭くすると、ライオンとシマウマの幸せは一致しない。

(5) 松本健一『石川啄木 近代日本詩人選』(一九八二年、筑摩書房)

(6) 岩城之徳『人物叢書 石川啄木』(昭和三十六年、吉川弘文館)

(7) 今の日本人は多弁にして自負心多き小児とは無論軽蔑しているので、小児は成人の父なりとは湖畔の詩人が歌えるところという尊敬した使い方とは正反対である。その時所によつて小児に異なる意味を含ませたので、矛盾と責めないで欲しい。

(8) 国分一太郎・小田切秀雄・山下肇編『文学のなかの教師』(昭和三十三年、明治図書)

(一九九六年九月二十五日)